
北風と太陽と

キサラギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北風と太陽と

【Nコード】

N7385Q

【作者名】

キサラギ

【あらすじ】

病気で入院する事になった高校二年生の国分大樹。

大樹は病室を抜け出し屋上で休んでいると一人の少女が現れた。

そして自殺をしようとした彼女を止めた大樹は『私を殺して』と言われる。

彼女の病気は誰とも触れられないとても残酷なものだった。

自殺未遂

「あー、あつつ」

俺は誰に言うわけでもなく一人呟いた。

ここは大学病院の屋上。

本当なら俺は高校二年生の夏休みを友達とエンジョイしてるはずだった。

でも夏風邪をひき、それにもかかわらず夜な夜な遊んでいるとマイコプラズマ肺炎とか言うわけのわからない病気に悪化し緊急入院をさせられる事になった。

自業自得と言われればそれまでだ。

うん、とりあえず暇。

屋上のベンチでゴロンと寝転がりながら強く輝く太陽を見ていると文句を言いたくなる。

まわりは年寄りばかりで本当に退屈だ。

その時ボタンと屋上の扉が閉まる音がした。

看護師さんが勝手に抜け出した俺を探しに来たのかと思い、体を起こす。

「え……？」

屋上に来たのは少女だった。

黒くまつすぐな長い髪、端正な顔立ちに白く透き通った肌。

まさしく美少女だった。

年は俺と同じくらいか？

俺は彼女にしばらく見とれてしまった。

彼女は風で髪をなびかせながら手すりの方まで歩いていく。

そして手すりを乗り越えた。

「って、おいおい！待て待て待て待て！」

俺は慌てて走り出した。

手すりの向こうの彼女は振り向いて鋭い目つきで俺を睨みつけた。

「何？あんた誰？」

「え、ああ俺は国分大樹。ここに入院してる」

「ふーん。じゃ」

彼女は前を向き飛び降りる体制をとる。

「だから待てって！早まるなよ！」

「私は死ぬべき人間よ」

ダメだ。

何言っても飛び降りそんな雰囲気だ。

「悩みあんのか？あるなら聞いてやるから！頼むから死なないでくれよ、なっ？頼み事とかも出来る範囲なら聞くからよ」

すると俺の必死さが伝わったのか手すりを越えてこちら側に戻ってくる。

とりあえず一安心。

「ねえ」

「うん？」

「頼み事聞いてくれるんでしょ？」

「出来る限りな。ちなみに金はない」

「簡単よ。今すぐ出来る事」

良かった、無理難題じゃなさそうだ。

「私を殺して」

「……え？」

彼女は不敵に笑みを浮かべるとそのまま去っていった。

何も言えずただ彼女の後ろ姿を見つめる俺に強い南風が吹き込む。

生ぬるいハズの夏の風は体の芯まで震わせるほど冷たかった。

「暇だ」

「次抜け出したらタダじゃおきませんよ」

「……すいません」

結局看護師さんに見つかり部屋まで連行されてこっぴどく叱られてしまった。

「まったく……」

まだブツブツ言っている中俺はあの子の姿が頭から離れなかった。

「里沙さん」

「今度はなに？」

「俺と同じぐらいの年の女の子って入院してます？」

「うん。けっこう居ると思うけど。あつ、もしかして恋しちゃった？」

里沙さんはニヤニヤと笑い実を楽しそうになっていく。

「さっき屋上で見かけて。黒髪の女の子で……なんか飛び降りようとしてみたいで……」

俺がそう話すとさっきまで恋バナに花を咲かせる女子高生みたいな顔をしていた里沙さんが今は看護師の顔に戻っていた。

「ねえ、彼女に触ってないよね」

「えっ、あつ、はい」

俺が返事すると彼女は柔らかい表情に戻していく。

「陽菜ちゃんよ。あなたが会ったのは」

「病室はどこなんですか？」

「西病棟よ」

「……西病棟って重病患者専用病棟ですよ？……彼女も？」

「ええ。そのせいで彼女はずっと孤独だった」

そう話す里沙さんの表情は悲しげだった。

「彼女に会いに行くのはいいけど、絶対に彼女の皮膚に触っちゃダメよ。手袋していきなさい」

「え？なんで？」

里沙さんは病室の扉の前に止まり顔をこちらに向けずに言った。

「彼女の病気は自分じゃなくて周りを不幸にさせるの」

そう言うとき彼女は出て行ってしまった。

さっぱり意味が分からない。

やっぱり俺の頭には彼女の姿が浮かんでいた。

『私を殺して』

そう言った彼女の目はとても寂しそうだった。

陽菜

「結局来てしまった……」

天道陽菜と表札がある病室の前に俺は立っていた。

「でもどう入ればいいんだ？」

今まで重病患者と接した事がない俺は傷つけてしまわないかで不安だ。

「誰？」

その声は俺の右側から聞こえた。

顔を向けるとそこには天道陽菜が立っている。

「あつ……えつと」

「入れば？」

俺がしどろもどろしてるうちに彼女は病室に入っていく。

俺もそれに続いた。

彼女はベッドに横たわるとそっぽを向いてるみたいに窓の外を見つめていた。

「で、何？殺してくれるの？」

「え、ああ殺せるわけないだろ」

「まあそうね。私も他人にこれ以上迷惑かけるつもりないし」

意外とあっさりしてるな。

「それにあなたの方が自殺志願者じゃないの？」

「へ？」

「だって手袋してない」

「ああ……いやなんか陽菜の事病原菌扱いしてるみたいで嫌だったんだ」

あつ、つい下の名前で呼んでしまった。

そんな事を考えて照れていた俺に陽菜の予想外の言葉が耳に届く。

「ええ、私は病原菌よ」

「……うつるのか？」

彼女は無言で頷いた。

表情はまったく無くて人形のようにだった。

「やっぱり……だいぶ悪い病気なんだな。具合悪いのか？」

「いえ私は至って健康よ。病院にいる必要ないくらい」

え？と心の中で戸惑いながら彼女の目を見るとまっすぐ俺を見つめ返していた。

嘘をついてるようには見えない。

彼女はおもむろに立ち上がると窓を開けた。

空は灰色の雲が覆い、風は少し涼しい。

そういえば台風が近づいてたんだっけ。

病室に入ってくる風に紛れて雨の匂いがした。

「私の病気は私の皮膚に触れたら他の人に感染する病気。名前すらない未知の病気よ」

「未知……？」

「ええ。症例がない。だから私以外にこの病気にかかった人の生存率はゼロよ」

「それはいつから？陽菜は大丈夫なのか？」

「生まれた時から。言い切る事は出来ないけど大丈夫」

彼女の寂しそうな目の理由が分かった気がする。

彼女はずっと孤独なんだ。

誰にも触れられず人の温もりをほとんど知らない彼女に対して周りもきつと敬遠したんだろう。

それってスゴく悲しいことじゃねえか。

「今のあなたの目は嫌い。私同情とか大嫌いなもの」

「……悪い」

「……無理強いはしないけどお願いがあるんだけど」

「なんだ？」

「本を探してほしいの」

「本？」

「タイトルは忘れたけれど小さなネズミのお話」

同情とかかもしれないけど俺はこの時点ですっかり力になってあげようとか軽い気持ちでなっていた。

その甘さをまだ俺は気づく事が出来ない。

「どんな話？」

「暴れん坊のネズミと心優しいネズミのお話。暴れん坊ネズミはい

つも暴れて村のネズミたちに迷惑をかけてるの。内容がよく思い出せなくて」

「分かった。探してみる」

俺は病室を出ようと扉に手をかける。

「待つて」

陽菜の声に振り返ると彼女の目はまたあの時の目だった。

「私は北風。みんなを困らせるだけで私に近づくメリットはないのよ？それでもいいの？」

とても馬鹿らしい事を寂しそうに言うので俺は思わず笑ってしまった。

彼女はそれをキョトンとしてながら見ている。

「友達になるのにメリットなんかいるかよ？なりたいからなるんだろーが。アホ」

俺はそのまま病室を出て扉を閉めた。

その時中からまたね、と声が聞こえたような気がした。

私は窓を閉めた。

嵐のように去っていった彼の事を考える。

変人。

その言葉しか思いつかない。

私の病気の事を聞いて逃げるところか友達になるなんて気が狂って
るとしか思えない。

本当に変わっている。

でもあの本の事頼めて良かった。

あの本は私にとって大事な物だったから。

記憶は薄れてしまった。

でももう一度読んで思い出したい。

そしたら覚悟を決められるはずだから。

ふとまた彼の顔を思い出す。

「おう、陽菜―検診の時間―って……」

私の主治医の冬木先生が口を大きく開けて愕然としながら入り口に立っていた。

「どうしたんです？整った顔が台無しですよ？」

「おまつ、おまつ今……笑ってるよな？」

私はそう言われ窓を見ると窓に反射した私の顔は笑顔だった。

ああ……私も気が狂ってしまったんだなとその時はそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7385q/>

北風と太陽と

2011年10月7日15時21分発行